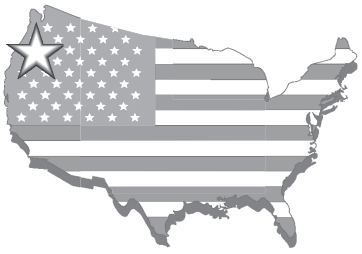
アメリカ留学日記
私の異文化体験記（2）

早稲田大学文化構想学部 3 年
三浦　礼子



2009 年 9 月から 2010 年 6 月まで、オレゴン州ポートランドの Portland State University に留学します。
このコラムでは、私の留学生としての「異文化体験」を記していきます。

9月の 23 日から始まったポートランドでの留学生活も、そろそろ1カ月を迎えます。今改めてこの1カ月間を振り返ってみると、・街に慣れること・学校に慣れること・勉強のリズムをつけることに必死で、あっという間に時間が過ぎていきました。というと少し大変そうに聞こえますが、特に大きな問題や不安もなくスタートを切り、充実した毎日を送っています。

1、新しい生活がはじまって

いきなりですが、こちらにきて今更ながらインターネットやパソコンの便利さに驚かされています。日本にいる家族や友人とも、インターネットを通して無料で電話ができますし、インターネット上でのコメント交換や情報共有が当たり前のように行われているため、連絡を取りたい相手とはすぐにコンタクトをとることができます。さらに日本のニュースなどもすぐに知ることができるというのは、帰国してから日本で就職をする身にとっても大きいです。決して大げさでなく、そういったインターネット上のサービスを使わずに暮らすほうが難しいくらいです。私自身もこちらに来てから家族とのやり取りはメールで頻繁にしていますし、日本にいる友人や、別の場所に留学中の友人に電話をかけたりして、久々のおしゃべりを楽しんでいます。そのせいかどうかは分かりませんが、こちらの生活にストレスがたまったりホームシックになったりするような気配が全くありません。私はそこまで頻繁に日本に連絡を取るほうではありませんが、やはりいつでもコンタクトをとれるというのはかなりの安心感があるのだと思います。このように異国に来てカルチャーショックを感じるよりも、日本で当たり前のようにしていたことに改めて感心することも多いというのは、少し変な気もしますがなかなか面白いです。

校外学習にてOregonのYamasa工場見学

2、2つの国の授業を比較して

先日、日本の大学に留学経験のあるアメリカ人学生と、日本人から見たアメリカの学生と、アメリカ人から見た日本の学生の違いについて話をしました。彼が一番の違いとして挙げたことは、授業の雰囲気についてです。日本の大学は、ゼミや語学などの少人数制の授業を除き、ほとんどが教授のレクチャーを聞いてノートをとったりレジュメを読んだりという、受け身の学習スタイルです。「たとえ講義の途中で質疑応答の時間があったとしても、気軽に発言できるような空気ができていない」、「日本でも空気を良い意味で崩せる人が、1人ではなく2人以上いれば雰囲気も変わってくるのに」と彼は言っていました。

私も実際にこちらの授業を受けていて感じましたが、ここで重要視されるのは授業に出席することではなく参加することです。何かリアクションをしなければ考えが伝わりません。瞬時に質問に答える力を常に求められます。そしてそれが直接成績にも反映されるため気が抜けません。日本ではたいてい出席とテストの結果をベースとして評価されていたので、そこがアメリカとは大きく違う点です。

もちろん大学の講義に限ったことではなく、こういった評価方法や授業のスタイルというものは小・中・高校、それ以前に日本人の文化や国民性とも関係しているように思えます。「KY(空気が読めない)」という言葉が 2007 年の流行語大賞としてノミネートされたことは記憶にも新しいですが、「空気を読む」という文化は私たち日本人に深く根付いているようです。

アメリカの文化と日本の文化は大きく違っていて、その両方に良い面も悪い面もあります。ただ単に「郷に入っては郷に従え」の言葉通りにアメリカナイズされるのではなく、自分のもつ日本人らしさも大事に新しい価値観も取り入れていくことができたらよりお互いの文化を理解できるはずです。新しいものを受け入れることを恐れずに視野を広げること、これは次号までの課題にしようと思います。